

研究

ストレスコーピングと親役割達成感との関係

—子どもの自己主張に対する親のストレスに着目して—

寺 蘭 さおり

〔論文要旨〕

本研究は保育園、幼稚園へ通う子どもをもつ夫婦147組を対象に、子どもの自己主張に対する親のストレスに焦点を当て、自己主張に対する親のストレスを明らかにし、このような場面における親のストレスコーピングと親役割達成感の関連性を検討した。

結果、子どもの自己主張に対する親のストレスは「泣く・ぐずる」、「きょうだい・他児とのトラブル」、「生活習慣」、「無理な要求」、「自分本位」、「口答え」、「暴力」の7個のカテゴリーに分類された。こうした場面におけるストレスコーピングとの関係では父親において「解決志向」の使用が、また母親において「解決志向」や「サポート希求」の使用が高いほど親役割達成感の得点が高いことが明らかになった。

Key words : 子どもの自己主張, ストレスコーピング, 親役割達成感

I. 問題と目的

近年、乳幼児期の発達として捉えられてきた子どもの反抗や自己主張をこの時期の親の適応過程として検討されている¹⁾。これによると特に第1子の子どもの母親は子どもの反抗や自己主張に対して否定的な感情をもち、親である自己の視点から子どもの行動を捉えやすく、自己の視点と子どもの視点との間で葛藤を抱くという。しかし母親はこれらの葛藤に対し子どもの視点と自己の視点との調整を見出していくことでこれらの状況に適応していくという。子どもの反抗期は母子相互の適応的変化の結果として終息していく²⁾といわれるように、親は自己の行動や感情の調整を図ることが必要となる。

しかしこうした調整を図ることは滑らかではない。子どもとの関係で生じた母親の育児ストレスは母親の抑うつ度に影響することも報告さ

れている³⁾ことから子どもの自己主張に対するストレスも親の精神的健康に影響するであろう。

「言い聞かせてもわかってくれない」、「思い通りに行動しない」など、親は子どもの自己主張に対応する時、葛藤が生じストレスを感じていることが予測される。ストレスフルなイベントを処理しようとして意識的に行われる認知的努力（行動および思考）をコーピングという⁴⁾。コーピングは健康や適応のキーワードとなっている⁵⁾。これらのコーピングには自分自身の対応を変える努力をして解決しようと試みたり（積極的コーピング）、その問題状況自体をあきらめて葛藤を処理したりする（消極的コーピング）ことが含まれている。育児ストレスに対し積極的コーピングを利用する母親は健康低下がなく、それとは逆に消極的コーピングを使用する母親は健康低下をきたしやすいとの報告があ

Relationship between Stress Coping and Parents' Role Attainment

[2036]

— Parental Stress for Children's Self-assertion —

受付 08. 5. 2

Saori TERAZONO

採用 09. 2. 13

愛知県公立大学法人愛知県立大学看護学部（研究職）

別刷請求先：寺蘭さおり 愛知県立大学守山キャンパス 〒463-8502 愛知県名古屋守山区上志段味東谷

Tel : 052-736-1401 Fax : 052-736-1415

る⁶⁾ことから子どもとの関係性で生じたストレスのコーピングは親の精神的健康に影響することが考えられる。

では子どもとの関係性で生じたストレスのコーピングは親にどう影響するのだろうか。子どもの反抗や自己主張を扱いにくいと認知する母親の自己評価は扱いやすいと認知する母親よりも低いという⁷⁾。また2歳の母親より3歳の母親の方が子どもの自己主張に対して否定的な感情を強く感じ、子どもへの対応にも影響を及ぼすという⁸⁾。すなわち子どもの自己主張に対応する親の否定的な感情は親の自己評価を下げ、親子の関係性は悪循環となり育児ストレスが生じることが考えられる。したがって親のストレスコーピングは親役割に対する評価や子どもとの関係性に影響することが考えられる。

そこで本研究では親役割に対する評価や子どもとの関係性として親役割達成感に着目する。この測度は本来、母親を対象として作成された母親役割達成感であり母親が子どもとの人間関係や自己の成長の点で満足している程度を測定するものである⁹⁾。近年、父親のストレスについても報告されており¹⁰⁾、母親のみならず父親においてもストレスコーピングが子どもとの関係性や自己の成長の満足度にも影響することが考えられる。

以上のことから本研究では否定的に捉えられやすい子どもの自己主張という場面に着目してそのときに生じる親のストレスについて明らかにすることを1つ目の目的とする。またこうした場面における親のストレスコーピングと親役割達成感との関係を明らかにすることを2つ目の目的とする。

II. 方 法

1. 調査対象者

保育所および幼稚園に子どもを預けている親に377通配布し、回収されたのは206通(回収率69.0%)であった。そのうち夫婦ともに回答を得られた170組(回収率45%)のうち欠損値を除いたデータは147組であった。父親の平均年齢は35.8歳(SD=5.47)、母親は33.7歳(SD=4.14)であった。このうち2歳児クラス57名(第1子35名、第2子以降22名)、3歳児ク

ラス47名(第1子20名、第2子以降27名)、4歳児クラス43名(第1子27名、第2子以降16名)であった。家族形態は核家族家庭が131組(89.1%)、大家族家庭が16組(10.9%)であった。

2. 調査方法

北海道、徳島県、愛媛県、鹿児島県の保育所および幼稚園に調査協力を依頼し、園ごとに園長、または学級担任が2歳児、3歳児、4歳児クラスの父母に質問紙を配布し家庭で記入後、封をしてそれぞれの園に提出してもらったものを回収した。また筆者の友人・知人を介して保育所および幼稚園に通う子どもの父母に質問紙を配布し、郵送法にて回収した。質問紙に、回答は統計的に処理されること、調査は強制ではないことを明記した。調査時期は2006年8月中旬から10月初旬であった。

3. 質問紙の内容

1) フェイスシート

親の性別、年齢、子どもの所属クラス(2歳児クラス、3歳児クラス、4歳児クラス)、出生順位、家族形態の記入を求めた。

2) ストレスコーピング尺度

本研究では尾関によって作成されたストレスコーピング尺度¹¹⁾を参考にしながら、項目を提示した。具体的には子どもが自己主張したときに生じるストレスに対する親のストレスコーピングの内容である。まず最近2~3か月の子どもの自己主張に対するストレスの内容について自由記述をしてもらい、次に実際の育児場面で用いたコーピングの仕方を回答しやすいように表現を改めた。そして改めたものを3組の親(父親3名、母親3名)に、内容の重複、育児場面で想定できる内容かどうか、表現のおかしなところはないかどうか評価してもらい修正を加え、14項目からなる尺度を作成した。この育児ストレスコーピング尺度は積極的なコーピングとして「問題焦点型(5項目)」、「情動焦点型(3項目)」また消極的なコーピングとして「回避・逃避型(6項目)」という3つの下位構造を想定している。本研究では、項目に対する評価は「最も強くストレスを感じたこと」に対して、あなたがどのように考えたり、行動したりして

いるか」について「全く当てはまらない」～「よく当てはまる」までの5段階評定で回答を求めた。点数が高いほどそのストレスコーピングを使用していることを示すものである。

3) 親役割達成感尺度

土肥ら⁹⁾によって作成された母親役割達成感尺度を用いた。この尺度は母親が子どもとの人間関係や自己の成長の点で満足している程度を測定するものである。本来、母親を対象にして作られた尺度ではあるが、3組の親(父親3名, 母親3名)に評定をしてもらった結果、内容や表現等に問題がなく、また「子どもの成長に最も喜びを感じている」、「子どもと楽しく遊んでいる」、「子どもによい環境を与えている」など本尺度に含まれる項目は母親役割の達成感に限らず子どもとの関係性に着目して作成された達成感を示す内容であるため父親への使用を試みた。この尺度は計10項目からなる。子育てを通しての考えについて「全く当てはまらない」～「よく当てはまる」までの5段階評定で回答を求めた。点数が高いほど親役割達成感が高いことを示すものである。

Ⅲ. 結 果

1. 子どもの自己主張に対する親のストレスの内容

147組の夫婦のうち、父親103名(70.7%), 母親127名(86.4%)の記述が得られた。母親の方が若干多い傾向がみられるが統計的に有意な差はなかった。次にその内容をカード化し、移動、再編、統合を繰り返した結果7個のカテゴリーに分類された。カテゴリー名は先行研究を参考にした¹²⁾。これらの分類の一致率は筆者と心理学専攻の大学院生との間で検討され95%であった。

子どもの自己主張に対する親のストレスの主な内容は父親において「生活習慣」(33.0%), 「無理な要求」(21.4%), 「自分本位」(20.4%)であり、母親において「自分本位」(29.9%), 「無理な要求」(24.4%), 「生活習慣」(18.1%)であった。「生活習慣」においては母親より父親の方が相対的に高い傾向を示した。また「自分本位」においては父親より母親の方が相対的に高い傾向を示した。

子どものクラスおよび出生順に関する分布は

大きな偏りが存在するため、子どものクラスごとに分類してこれらの内容に違いがあるのかを検討した。全体的に年齢とともに子どもの自己主張に対するストレスは減少傾向がみられた。「泣く、ぐずる」には「私が寝不足のとき子どもが泣き叫ぶ(2歳児父親)」、「気に入らないことがあるといつまでも泣き叫ぶ(2歳児母親)」、「子どもが何かを伝えようとしているが私が理解できず子どもが大泣きしてしまった(3歳児父親)」、「保育園に預ける時泣き続けた(4歳児母親)」などが含まれ、「きょうだいや他児とのトラブル」には「他の子どもを叩いた時(2歳児父親)」、「小さい子どもにイジワルをする(4歳児母親)」などが含まれていた。「生活習慣」には「歯みがきを嫌がる(2歳児、3歳児父親)」、「夜遅くまで遊ぶ(2歳児母親)」、「ダラダラ食べて少食である(4歳児父親、母親)」などが含まれ、「無理な要求」には「他の物を欲しが(2歳児父親、母親)」、「着替えのときない服を着たがる(4歳児父親、母親)」などが含まれていた。「自分本位」には「外出時、帰りがたらない(2歳児父親、母親)」、「カードゲームを何度もやりたがる(3歳児父親、母親)」、「スーパーで逃げ回る(4歳児父親)」、「遊びに夢中で声かけをしても返事がない(4歳児母親)」などが含まれていた。「口答え」には「何に対してもイヤという(2歳児父親)」、「うるせい、バカ(4歳児母親)」、「暴力」には「気に入らないとモノを投げる(2歳児父親、母親)」、「気に入らないことがあると叩いてくる(4歳児母親)」などが含まれていた。この分類内容とそれぞれの頻度を表1に示した。

2. 尺度の分析

本研究では尾関によって作成されたストレスコーピング尺度¹¹⁾を参考にしながら、子どもが自己主張したときに生じるストレスに対するストレスコーピングの項目を提示したため、ストレスコーピング尺度に関して尺度の分析を行った。SPSS (12.00J for Windows, SPSS社)を用いて14項目に対して最尤法による探索的因子分析を行った。固有値は2.83, 2.40, 1.31, 1.05, 0.95…と変化していたので3因子構造が妥当であると考えられた。そこで3因子を

表1 子どもの自己主張に対する親のストレスの内容と頻度

ストレスの内容	定 義	父親			母親			全体	
		子どものクラス 2 3 4			子どものクラス 2 3 4			父親 (n=103)	母親 (n=127)
泣く・ぐずる	泣いたり、ぐずったりすること	5	4	1	7	5	3	10	15
きょうだい・他 児とのトラブル	きょうだいや他児とのけんか	6	4	0	3	7	3	10	13
生活習慣	食事、排泄や睡眠など生活習慣を守れない こと	20	10	4	14	7	2	34	23
無理な要求	ないものをほしがったり、好みを主張した りなど無理な要求をすること	10	6	6	19	6	6	22	31
自分本位	親の指示に対し言うことをきかないこと	7	7	7	10	14	14	21	38
口答え	親の指示に対し口答えをすること	0	3	1	0	0	2	4	2
暴力	親に対する暴力やモノにあたる	1	1	0	3	0	2	2	5

仮定した因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、3因子までで全分散の46.7%，因子負荷量|.35|以上が確認された。次にAmos5.0を用いてストレスコーピング尺度の確認的因子分析を行った。豊田の説明¹³⁾を基に適合度をみていくと、.90以上が採用基準であるGFIは.934と高い値を示し、またAGFIも.906と高い値を示した。さらに、.10以下の値を採用基準とするRMSEAは.061と十分な値を示した。また.90以上が採用基準であるCFIも.884とおおむね近い値を示した。本尺度構成は既存の尺度とは一部構成は異なったが、おおむね許容できる範囲の値が得られた。

第1因子では「子どもの自己主張はたいしたことではないと考える（回避・逃避型）」、「今はどうすることもできないので、自分がいつか子どもに対応できるようになるまで待つ（回避・逃避型）」、「子どもは自己主張することもあると思ってあきらめる（回避・逃避型）」など子どもの自己主張で感じたストレスに対して意図的にあきらめる項目を含んでいることから「意図的あきらめ」と命名した。

第2因子では「子どもへの対応で困っていることを周囲の人にきいてもらう（問題焦点型）」、「周囲の人に子どもへの対応を協力してもらうよう頼む（問題焦点型）」など子どもの自己主張で感じたストレスに対して周囲の人に支援を求める項目を含んでいることから「サポート希求」と命名した。

第3因子では「子どもへの対応を変えるよう努力する（問題焦点型）」、「今の子どもとのやりとりの経験はいつか自分のためになると思う

ことにする（情動焦点型）」、「子どもの良い面をみようとする（情動焦点型）」など子どもの自己主張で感じたストレスに対して肯定的に子どもとの関係を成立・改善・維持するために努力していることから、この因子を「解決志向」と命名した。

また本研究では親役割達成感尺度として土肥ら⁹⁾によって作成された母親役割達成感尺度を父親にも用いたため信頼性を検証した。Cronbachの α 係数を求めたところ、 $\alpha=0.878$ （父親 $\alpha=0.890$ ，母親 $\alpha=0.864$ ）と信頼性の保たれた尺度構成であり、今後の分析に用いるのに十分な信頼性が得られたと思われる。

3. ストレスコーピングの性差

まず父親と母親によりストレスコーピングに違いがあるかを検討した結果、母親は父親よりも「意図的あきらめ」($t(292)=2.39, p<0.05$)、「サポート希求」($t(284.8)=9.05, p<0.001$)、「解決志向」($t(292)=2.24, p<0.05$)の得点が高いことが明らかとなった(表2)。次に父親、母親別に子どものクラス、出生順によりストレスコーピングに違いがあるかを検討した結果、子どものクラス、出生順位による違いはみられ

表2 ストレスコーピングの性差

	父親	母親	t 値
意図的 あきらめ	2.43(0.67)	2.60(0.58)	$t(292)=2.39^*$
サポート 希求	2.10(0.68)	2.88(0.80)	$t(284.8)=9.05^{***}$
解決志向	2.94(0.67)	3.10(0.45)	$t(292)=2.24^*$

*** $p<.001$, * $p<.05$

なかったため今後父親, 母親ごとに検討していく(「意図的あきらめ」父親 $F(2, 141) = 0.23$, $n.s.$, 母親 $F(2, 141) = 1.33$, $n.s.$, 「サポート希求」父親 $F(2, 141) = 0.32$, $n.s.$, 母親 $F(2, 141) = 2.74$, $n.s.$, 「解決志向」父親 $F(2, 141) = 0.08$, $n.s.$, 母親 $F(2, 141) = 1.27$, $n.s.$)。

4. 夫婦間の親役割達成感の相関

夫婦間で親役割達成感に相関がみられるか検討した結果, 父親と母親の間で有意な正の相関がみられた($r = 0.277$, $p < 0.01$)。夫婦間の親役割達成感に関連があることが示された。

5. ストレスコーピングと親役割達成感の関係

ストレスコーピングの使用の違いによって親役割達成感の得点に差が認められるのかを検討するため, まず各ストレスコーピングの平均値を求め, その値を基に低群, 高群に分類した(表3)。それを基に親役割達成感に対し t 検定を行った。その結果, 父親において「解決志向」の使用が多い父親は少ない父親よりも親役割達成感の得点が高い傾向が示された($t(145) = 3.56$, $p < 0.01$) (表4)。また母親において「サポート希求」と「解決志向」の使用が多い母親は少ない母親よりも親役割達成感の得点が高い傾向が示された(「サポート希求」 $t(126.2) = 2.83$, $p < 0.01$, 「解決志向」 $t(145) = 6.18$, $p < 0.001$) (表5)。

表3 人数振り分け

	父親		母親	
	低群	高群	低群	高群
意図的あきらめ	73	74	73	74
サポート希求	86	61	71	76
解決志向	72	75	73	74

表4 父親の親役割達成感に対するストレスコーピングの効果

	低群	高群	t 値
意図的あきらめ	4.06(0.54)	3.90(0.67)	$t(145) = 1.59$
サポート希求	3.96(0.65)	4.01(0.55)	$t(145) = 0.58$
解決志向	3.80(0.65)	4.15(0.55)	$t(145) = 3.56^{**}$

$^{**}p < .01$

表5 母親の親役割達成感に対するストレスコーピングの効果

	低群	高群	t 値
意図的あきらめ	4.14(0.58)	4.09(0.49)	$t(145) = 0.51$
サポート希求	3.99(0.60)	4.23(0.43)	$t(126.2) = 2.83^{**}$
解決志向	3.87(0.50)	4.35(0.45)	$t(145) = 6.18^{***}$

$^{***}p < .001$, $^{**}p < .01$

IV. 考 察

1. 子どもの自己主張に対する親のストレスの内容

子どもの自己主張に対する親のストレスについて分析した結果, 父親は「生活習慣」でのストレスの頻度が相対的に高かった。「こうあるべき」と考える父親ほど不安傾向が高まることが示唆されている¹⁰⁾。父親は子どもとのかかわりの中であらゆるしつけ場面に遭遇し, 信念を持って子どもにしつけをするであろう。こうした場面で完璧な父親として子どもに関わる子どもが自己主張することによって父親の期待とは異なる態度をとり父親のストレスが生じることが考えられる。

一方母親は「自分本位」, 「無理な要求」でのストレスの頻度が相対的に高かった。これらは父親においても他のストレスより相対的に高い割合を示していた。「自分本位」の中には「ゲームは1回と約束したのに2回, 3回とやりたがる」というような場面が多かった。すなわち父親も母親も生活体験の中で子どもと約束をしてそれを守るという経験から社会規範を身につけさせようとしている。こうした場面で親自身の信念とは異なる行動をとることで親のストレスが生じることが考えられる。

次にこれらのストレスの内容を子どものクラス別に検討すると, 年齢が上がるにつれて「泣く・ぐずる」, 「生活習慣」, 「無理な要求」は減少し, 「自分本位」は増加していた。2~3歳にかけて言語を伴う自己主張が増加することから⁷⁾言語発達に伴い, 泣いて自己主張するのではなく言葉や行動で自己主張をするために「泣く, ぐずる」は減少することが考えられる。また年齢が上がるにつれて歯磨きや睡眠, 食事という基本的な生活習慣場面から「スーパーで

走ってはいけない」とか「ゲームは決められた回数だけ」など社会規範を身につける場面へと移行していた。子どもの生活パターンが広がるにつれて親は子どもと約束する機会が増えていることから、親は子どもの理解力の発達に応じたしつけを展開しているのではないだろうか。母親の子どもに抱く不快感は、日常的課題場面において課題を達成させようとする母親の要求とそれに対する子どもの要求とのせめぎあいによって引き起こされているという¹²⁾。つまりこうした日常的課題場面、すなわち親が子どもをしつける場面において「約束を守って欲しい」、「早寝の習慣を身につけて欲しい」、「食事をちゃんと食べて欲しい」などの親の要求と「〇〇したい」という子どもの要求とが対立することによって不快感を抱き、対処困難の場合、ストレスが生じるのではないだろうか。

子どもの反抗期は母子相互の適応的变化の結果として終息していく²⁾と言われるが、互いの要求が互いの視点から理解し合えたとき、適応的变化の結果として終息していくのではないだろうか。

2. ストレスコーピングの性差

ストレスコーピングの性差について母親は父親よりも各ストレスコーピングの得点が有意に高かった。特に女性は男性よりも「情緒的援助希求」の使用が多い¹⁴⁾と指摘があるように母親の場合、子どもとの関係でストレスが生じたとき他者に相談してストレスを処理することが考えられる。本研究においても特に「サポート希求」の得点が父親よりも母親の方が高いことから子育て中の母親への情緒的な支援の必要性であると思われる。

3. 夫婦間の親役割達成感

夫婦間の親役割達成感の関連を検討した結果、夫婦間に有意な相関があることが示された。すなわち夫婦間の親役割達成感の高さが関連していることが明らかとなった。この結果は夫婦間で子どもとの関係性や自己の成長について満足し合うようなコミュニケーションが必要と思われる。夫婦間の関係性が互いの親役割達成感に関連することが示された。

4. ストレスコーピングと親役割達成感の関係

父親、母親ともに「解決志向」の使用が高い親は低い親よりも親役割達成感が高いことが示された。このことは子どもの反抗や自己主張に対するストレスが生じたとき、肯定的に子どもとの関係を成立・改善・維持するために努力することで子どもとの関係性や自己の成長について満足する傾向が高くなることを示唆している。「解決志向」には「子どもの良い面をみようとする」、「子どもへの対応を変えるよう努力する」というような項目が含まれている。すなわちしつけ場面等で親の要求と子どもの要求が対立したとき、子どもの視点に立って子どもへの対応を考えることで親は子育てスキルを獲得し、子どもとの関係性や親としての成長を感じるのではないだろうか。

また母親のみ「サポート希求」の使用が高い親は低い親よりも親役割達成感が高いことが示された。このことは子どもの自己主張に対するストレスが生じたとき、子育てについて話をしたり相談をしたりすることで子どもとの関係性や自己の成長について満足する傾向が高くなることを示唆している。子どもとの関係で生じた母親の育児ストレスは母親の抑うつ度に影響する³⁾ことから、母親がこうしたストレスを相談できずにいることは母親の精神的健康にも影響することが考えられる。今回特に母親にのみ「サポート希求」の使用が親役割達成感の得点に差が認められたという結果はこの時期の母親に子育て支援が必要であるといえるであろう。

一方「子どもは自己主張することもあると思ってあきらめる」など子どもの自己主張で感じたストレスに対して意図的にあきらめるストレスコーピングは父親母親ともに親役割達成感の得点に差が認められなかった。自己主張する子どもを目の当たりにして、いくら積極的にコーピングしても変わりようもないこともある。こうした場面に遭遇したとき、消極的なコーピングをしたほうが効果的な場合もある。このようなアプローチの1つにコーピングの柔軟性がある。コーピングの柔軟性とはストレスフルなイベントに遭遇した際、状況に応じて使用するコーピングを変える能力であり¹⁵⁾、こうしたコーピングの柔軟性に富む者は抑うつ傾向が低

く、精神的に健康である¹⁶⁾。したがって子どもの自己主張に対応していてストレスが生じたとき、積極的にコーピングするだけではなく、時には距離を置いたりすることで肯定的に変化することも考えられよう。

5. 今後の課題

今回の調査対象者は保育所および幼稚園に子どもを預けている親が対象者である。保育所と幼稚園では保育環境や親の就労状況、サポート度などが異なり、親のストレスや親役割達成感にも影響することが考えられる。しかし今回、調査対象者を保育所と幼稚園に分類していないため、今後子どもの通園場所や親の就労の有無、サポート度を調査し親のストレスや親役割達成感についても検討することが必要であろう。また今回の調査対象者に対しストレス反応を測定していないため、本研究の調査対象者が実際に子どもの自己主張に対して高いストレスを感じていたかは明らかではない。したがって今後、子どもの自己主張に対応する親のストレスの内容とストレス度を調査し、ストレス場面に応じた効果的なストレスコーピングを検討することも必要であろう。

付 記

本研究の一部は、第71回日本心理学会において発表した。

謝 辞

本研究は、平成18年度鳴門教育大学大学院修士論文として提出したものを一部加筆、修正したものです。調査実施にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。また、修士論文をご指導いただきました鳴門教育大学の浜崎隆司教授に、厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 坂上裕子. 子どもの反抗期における母親の発達—歩行開始期の母子の共変化過程—. 風間書房, 2005.
- 2) 氏家達夫. 乳幼児と親の発達. 麻生 武, 内田 伸子. 講座生涯発達心理学第2巻 人生への旅立ち—胎児・乳児・幼児前期—. 東京: 金子書房

1995; 129-162.

- 3) 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり, 他. 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究 1994; 64: 409-416.
- 4) Lazarus, R.S. Coping theory and research, Past, present, and future. Psychosomatic Medicine 1993; 55: 234-247.
- 5) 加藤 司, 今田 寛. ストレス・コーピングの概念. 人文論究 (関西学院大学人文学会) 2001; 51: 37-53.
- 6) 間 三千夫, 筒井孝子, 中嶋和夫. 母親の育児ストレス・コーピングと精神的健康の関係. 信愛紀要 (和歌山信愛女子短期大学) 2002; 42: 54-58.
- 7) 高濱裕子, 渡辺利子. 母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 2006; 3: 1-7.
- 8) 高濱裕子, 渡辺利子. 子どもの反抗・自己主張とそれに対する母親の感情及び対処—2歳と3歳との比較—. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 2007; 4: 15-25.
- 9) 土肥伊都子, 広沢俊宗, 田中國夫. 多重な役割従事に関する研究—役割従事タイプ, 達成感と男性性, 女性性の効果—. 社会心理学研究 1990; 5: 137-145.
- 10) 清水嘉子. 父親の育児ストレスの実態に関する研究. 小児保健研究 2006; 1: 26-34.
- 11) 尾関友佳子. 大学生用ストレス自己評価尺度の改定—トランスアクションナルな分析に向けて—. 久留米大学大学院比較文化研究科年報 1993; 1: 95-114.
- 12) 菅野幸恵. 母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感情とそれに対する説明づけ. 発達心理学研究 2001; 12: 12-23.
- 13) 豊田秀樹. 共分散構造分析入門編—構造方程式モデリング. 東京: 朝倉書店 1998.
- 14) 島津明人. ストレスコーピングと性差 (特集 ストレスに性差はあるのか), 性差と医療. 2005; 2 (11): 1289-1293.
- 15) Westmen M, Shiron A. Dimensions of coping behavior: A proposed conceptual framework. Anxiety, Stress, and Coping, 1994; 8: 87-100.
- 16) 加藤 司. コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係. 心理学研究 2001; 72: 57-63.